本稿は、「朝の会 例会誌」第78最終号（2026年1月）から一部を抜粋

第三節　イスラエルの超法規的な暴力性は何処から来るのか？

森本英之　元 河合塾文化教育研究所

一九四五年にアウシュヴィッツで六〇〇万人近い犠牲者を出したジェノサイドを体験してきたユダヤ人が解放され、その三年後の一九四八年にはパレスチナの地にイスラエル国の「建国戦争」を起こし、七〇～七五万人のパレスチナ人が故国から追放される「ナクバ(大災厄)」をもたらしています。そして、二〇二三年十月七日にハマースの反撃を機にイスラエル軍のガザ侵攻が始まって二年目には七万人を超える死者と十三万人を超える負傷者を生んでいます。最上敏樹氏(早大名誉教授)は、前者のアウシュヴィッツをユダヤ人を対象とするジェノサイドであり、後者のパレスチナ侵攻をユダヤ人による長期的且つ緩慢なジェノサイドの始まりだという。

二〇二六年の今年はアウシュヴィッツからユダヤ人が解放されて八十一年目になります。この間、イスラエル軍はイランやレバノンやイエメン等への空爆を繰り返しています。国連には安全保障理事会があるのに「国際法違反で非難決議」をしても、アメリカをはじめとする大国の拒否権行使で否決され、国連の機能そのものが疑われています。

数多の闘いの歴史は綿々と続いてきましたが、歴史の最前線は、いつもその破壊行為の下に晒されており、我々の想像力が問われています。例えば、イスラエルの一方的な破壊力の下に晒されたガザでは、眼前の瓦礫の中から救われた少女から「私は夢を見ているの？」と声をかけられた若い救助隊員、或いは休戦中のガザのテント村の前で「人生には何も美しいものなんてないよ」と零す少年の言葉を前にしていた取材班記者の姿を目にする時、彼ら、或いは我々自身も答えを問われていると思います。

少数与党のネタニヤフ政権だから、彼の政策に批判的な人たちが少なからずいることは想像できますが、ハーバード大学等に「反ユダヤ主義」のレッテルを張り、学術予算をカットすると豪語するトランプ政権を支えてきた者達にも彼の自己利益中心の「ディール(取引)外交」に疑問視する選挙民が増えつつあるとはいえ、既に、例えば英国外務大臣の二枚舌外交の「バルフォア宣言」のように自己利益に走ってきた欧州諸国も既に手を汚しており、アメリカと同様西欧諸国も、「世界の良識」を示すリーダーたりえないと知ってしまった今、最早や、大胆な仮説に思えた著書『西洋の敗北』(エマニュエル・ドット著)のように「良識の羅針盤」を失ってしまった後の世界を想像します。そして、イスラエルの国際法を無視した一連の軍事行為が、中東の不安定化をもたらすことは目に見えています。そうした「思い上がり」をもたらす一つの背景について考える時、確かに現実として「トルーマンドクトリン」が果たした影響は大きいと思います。これは当誌七四号で藤田進先生(東京外国語大学名誉教授)の論考でも次のように語られています。

第二次世界大戦後の一九四七年三月十三日、米巨大石油資本のアラムコが戦後ヨーロッパ経済復興に向けて中東石油生産を急増し、莫大な利益を上げることに取り組むことを発表し、その翌日トルーマン米大統領が、「米国は中東の石油生産・輸送体制を共産主義か

ら防衛する」と発表した(トルーマン・ドクトリン)。この時以来石油を軸とするアメリカの中東支配がはじまり、今日に至っている。当時、ベングリオン(初代のイスラエル首相)を中心とするシオニストグループが、アウシュヴィッツ強制収容所からユダヤ難民の安住の地として、アラブ人が住んでいるパレスチナに「ユダヤ人国家」を実現せよと英委任統治政府に強く迫っていた。イギリスは第一次世界大戦時の「三枚舌外交」によってユダヤ人にその「ナショナル・ホーム」をアラブ人の土地に建てることを認めていたのである。一方、米大統領選でユダヤ票を重視してシオニストを支援していたトルーマンは、前大統領ルーズヴェルトと違って、アメリカの援助で「ユダヤ人国家」を建設し、ヨーロッパへの石油輸送路である東地中海の防衛の砦としてパレスチナを確保することにした。一九四八年に建国して以来、イスラエルはアメリカの政治的・経済的援助に支えられながら、あらゆる手段を講じてアラブ住民追放によるパレスチナでの自国領土拡大を図ってきた。そして現在、ガザ沖合に天然ガスが発見され、イスラエルはガザ全域を手に入れる取り組みに乗り出していたのである。-----

私は、このように政治経済の両面でイスラエルとアメリカが繋がっていることはイスラエルの「超法規的暴力行為」を支えるプロモーターとして大きいと思います。しかし、二極対立の冷戦構造が終わり、多極構造に向かうかもしれない今、どう変質するのかは、未だ読めないでいます。

(以下、省略)

朝（あした）の会　研究会講話　活動録【2011～2025年】2025.12.29

第一回　2004.7.31　「現代とはどういう時代なのか・哲学者の視点から」
第二回　2004.10.2　「今中国は…そして私は…」
第三回　2004.11.13　「文明の衰退とシュメール人に学ぶ再生」
第四回　2005.2.19　「同上…五千年前の状況から見た現在の危機」
第五回　2005.4.9　「異文化と出合う時、西欧哲学研究への批判的反省」
第六回　2005.6.18　「　同右　」
第七回　2005.9.10　「試論・人間の歴史としての中国史」
第八回　2005.11.19　「　同右　」
第九回　2006.2.18　映画「アルナの子どもたち」講話「リアリティを超える言葉は」
第十回　2006.4.29　「シニカルな経済学或いは経済学のシニシズム」
第十一回　2006.7.1　「東アジアの中の日本国憲法」
第十二回　2006.9.9　「現代の中国についての一考察」
第十三回　2006.11.26　「郭沫若と魯迅、二人の知識人を隔てたもの」
第十四回　2007.1.27　谷川道雄著『戦後日本から現代中国へ』を巡って
第十五回　2007.3.24　「現代の中国映画から」
第十六回　2007.5.19　「ヘーゲル哲学と現代」
第十七回　2007.7.21　「神獣鏡の型式学と三角縁神獣鏡：仏教の中原伝来と受容」
第十八回　2007.9.22　「同上…卑弥呼の要望に対応した魏王朝の受容…1.」
第十九回　2007.11.3　「井上準之助の金解禁政策について」
第二十回　2008.1.19　「瓦礫の中で再生を考える1」
第二一回　2008.3.8　「同上・パレスチナ問題への一視点」
第二二回　2008.5.17　「神獣鏡の型式学と三角縁神獣鏡　Ⅲ」
第二三回　2008.9.20　「中国古典時代の集結と東アジアの成立」
第二四回　2008.12.20　「「理性は常に理性的であるか…『精神の現象学』の現代的意味」
第二五回　2009.1.28　「金融主義の蹉跌」
第二六回　2009.5.9　「三角縁鏡親魏倭王・卑弥呼」

第二七回　2009. 7. 11　「シュメール文明のナイル征服からエジプト文明の創造へ」
第二八回　2009. 9. 26　「同人誌『四季』28年と森本英之の軌跡――『記憶の風穴』」
第二九回　2009. 11. 28　「1945～49年における中国・朝鮮」
第三十回　2010. 3. 10　「中国の現状について」
第三一回　2010. 3. 20　「超紫陽の〈遺言〉とは…『趙紫陽極秘回顧録』を読んで」
第三二回　2010. 7. 24　「王国林『失地農民調査』翻訳刊行の動機について」
第三三回　2010. 9. 4　「耶馬台国の所在地問題は何故解決しないか」
第三四回　2011. 1. 15　「中国の民主化は可能か『裸の中国』を読んで」
第三五回　2011. 3. 9　「中国農民の一動向」
第三六回　2011. 6. 4　「犯罪発生率から見た社会――治安は悪化しているか」
第三七回　2011. 9. 24　A「原発問題をどう捉えるか」
B「大震災の被災地に立って」
第三八回　2011. 12. 10　「バイオマスの可能性」
第三九回　2011. 12. 10　「スマートグリッドとスマートホン」
第四十回　2012. 5. 12　「少子化問題を学校制度から考える」
第四一回　2012. 7. 14　「ホロコーストとパレスチナ」
第四二回　2012. 9. 29　「西南中国ラフ族の村に暮らして…映像とお話」
第四三回　2012. 12. 15　「中国の未来に何があるか。そして我々はどうそれと向き合うか」
第四四回　2013. 2. 16　「自分史を歴史の中に位置づける試み」
第四五回　2013. 5. 26　「哲学の考え方…公理主義と解釈学」
第四六回　2013. 8. 10　「近代中国及び日本における経世思想と政治思想」
第四七回　2013. 11. 30　直近のシリアとエジプトをどう見るか、」
第四八回　2014 . 4. 22　清時代の官僚制と汚職…現代との繋がり」
第四九回　2014. 4. 26　反省の釜ヶ崎から見えてくる日本」
第五十回　2014. 8. 02　「マルサスの『人口論』と現代的意味について」
第五一回　2014. 10. 18　「近未来における日本の人口問題に関する一考察」
第五二回　2015. 2. 7　「技術者倫理、から垣間見える社会」

第五三回 2015. 4. 18 「日米関係をアメリカの世界政策から見る。」
第五四回 2015. 8. 29 同右
第五五回 2015. 11. 28 「大谷光瑞と台湾」　画像
第五六回 2016. 1. 30 「ホルスタイン乳牛の祖先…シュメール起源を仮定すると」
第五七回 2016. 5. 28 「中東におけるキリスト教の立ち位置」
第五八回 2016. 8. 6 「下士官国家日本の行方」
第五九回 2016. 10. 22 「近代中国以降における政治と思想」
第六十回 2017. 2. 4 「ギリシャ土器幾何学模様成立の意義」
第六一回 2017. 5. 20 「トランプ政権と世界・トランプ外交の真実」
第六二回 2017. 8. 26 「変態する世界」について
第六三回 2017. 11. 18 「酵素について」
第六四回 2018. 3. 10 「『時代』というもの…明治の書生・大正・昭和の生徒・学生、そして今」
第六五回 2018. 4. 14 「台湾ドキュメンタリー映画『日曜日の散歩者：忘れられた台湾詩人たち』」
第六六回 2018. 11. 10 「ポピュリズムにおける心理的要素の意義」
第六七回 2019. 3. 16 「留学・駐在を通して私が感じた中国」
第六八回 2019. 7. 6 「気候変動によるアフリカの自然変化とその影響」
第六九回 2019. 11. 09 『変化する科学と社会を考える』
第七十回 2021. 11. 6 「阿片戦争と魏源・包世臣に関する研究再考」
第七一回 2022. 11 誌上例会 「プーチンの侵攻を考える・世界史の試練としてのウクライナ戦争」
第七二回 2023. 3. 4 講話と誌上報告 「世界秩序瓦解から見えてくるもの」
第七三回 2023. 9. 2 「無知の時代をいかに生きるか」
第七四回 2023. 12 誌上例会 「ポリクライシスの時代を生きる」
第七五回 2024. 2. 24 「ビジネスマンとして世界を巡って感じていること」
第七六回 2024. 7 誌上例会 「私にとって現代とは」「人工知能がもたらす社会変革」
第七七回 2025. 2. 22 「ガザ戦争はなぜ起きたか」
第七八回 2026. 2 最終 誌上例会回想編